〔富岡鉄斎展によせて〕

鉄斎筆　三津浜魚市図　明治８年（40歳）

紙本墨画淡彩　180.2cm×81.9cm　鉄斎美術館蔵

鉄斎は慶応３年、32歳のとき画家中島華陽の娘、達と結婚、翌年には長女秋が生まれましたが、不幸にしてその翌年には妻を失いました。明治５年、縁あって愛媛県浮穴郡豊田村の佐々木禎三氏の三女春子を後妻に迎えることになりました。その後、夫人の出身地の松山市の郊外、砥部へも数回訪れたらしく、砥部では作品の頒布会も開かれたと伝えられています。

当時は京都から船で淀川を下って大阪へ、さらに海路を松山の三津浜港へと向います。したがいまして、往還には必ず三津浜に宿泊しなければなりませんので、同地の数寄者たちとも識り合ったようです。なかでも、江戸時代から藩の海上運輸に携わる旧家の石崎家にはたびたび宿を借り、作品の頒布会も催しました。石崎家と鉄斎との交際には、同家の番頭でありました近藤文太郎氏が仲にあって、潤筆料や名産の品を送るなどの世話をしました。

鉄斎は明治８年11月13日、三津浜の石崎家の「抱山枕海楼」に泊り、翌日の早朝、浜辺の漁市を見て興趣を感じ、京都への出発間際に酒席で本図を描き、石崎氏に贈りました。

賛「山可樵水可漁。太（大）夫招不登車」（山は樵る可く水は漁る可し。大夫招けども車に登らず）。賛の典拠は明の李日華の句（「竹懶畫賸・圖高永仁年丈扇」）からで、田園生活は楽しいので、政府の高官として招かれても出仕するようなことはしない、という意味です。句に続けて、本図の制作の動機を記しています。「是の日、將に、京都に返らんとして、艤舟（出船の用意）前に在り、乃ち匆々の筆、殊に意の如くならず、點染半ばにして舟に登ると云ふ。」しかし、かえって三津浜の魚市の活気をそっくりみごとに伝えています。群衆の表現がユーモラスで面白く、その一人一人に、鉄斎のやさしい目差しが感じられます。　（林　進）

三津浜魚市図

同図（賛）

季刊 美のたより №83
昭和 63 年 5 月 27 日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.